

2025 年度前期・後期 授業改善アンケート集計結果に対するコメント

一文芸学部

学部長 木下 誠

2025 年度の文芸学部では、教育効果を踏まえ、一部授業にオンライン形式を取り入れながら、原則として対面授業を中心に教育活動を実施しました。以下、2025 年度授業改善アンケートの結果について、2024 年度および大学全体平均との差異にも触れながら概観します。

まず、設問 1 および設問 2 は、学生の授業への取り組み姿勢に関する項目です。設問 1 の欠席状況は前年度とほぼ同水準を維持しており、安定した出席傾向が見られます。また、設問 2「この授業の内容を理解するために努力した」についても、高い評価傾向が継続しています。とりわけ「4」および「5」の回答が大半を占めており、学生が授業理解のために主体的に学習へ取り組んでいることがうかがえます。学部平均値は 4.37 であり、大学全体平均の 4.34 を上回っています。

設問 3 から 10 は、教員の授業運営に対する評価項目です。全体として前年度から大きな変化はなく、いずれも 4.4 前後から 4.5 台の高い評価を維持しています。特に、設問 3「教員は休講や遅刻をすることなく授業を行っていた」、設問 4「シラバスと授業内容は一致していた」、設問 5「教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった」などは、いずれも大学全体平均を上回る結果となっており、授業運営の安定性や丁寧さが高く評価されていることが分かります。

一方、設問 8「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促していた」は 4.28 であり、大学全体平均の 4.12 を上回っているものの、文芸学部内の他項目と比較するとやや低めの数値となっています。しかしこれは、文芸学部の教育内容の特性とも関係していると考えられます。授業中の即時的な発言や討論だけでなく、授業内容を踏まえて各自が考察を深め、コメントペーパーや授業外課題を通して理解を深める学習姿勢を重視しているためです。そのような本学部の特徴は、設問 9「教員は質問への回答や課題の返却・解説等を十分にしていた」に対しての 4.44 と高い数値に表れており、大学全体平均 4.38 を上回っています。教員が学生へのフィードバックを丁寧に行い、教育効果の向上に努めていることがうかがえます。

設問 14「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」は平均 4.46 という高い値を示しており、2024 年度の文芸学部の平均 4.42 と 2025 年度の大学全体平均 4.39 を上

回っています。また、「4」および「5」の回答を合わせると9割近くに達し、多くの学生が授業内容に高い満足感を持っていることが分かります。

さらに、この設問14と比較的強い関連を持つ設問12「この分野への興味・関心が引き起こされた」と、設問13「この授業のレベルは適切であった」についても、文芸学部はいずれも大学全体平均を上回っています。設問12は文芸学部4.34に対して大学全体4.26、設問13は文芸学部4.35に対して大学全体4.27となっており、授業内容への知的関心や授業水準に対する満足度の高さが示されています。授業によっては一定の難易度を感じる場合もあるかもしれませんが、それは教員が学生の可能性を信頼し、成長を促していることの表れでもあります。

また、「この授業で用いられた授業手法」に関する設問からは、文芸学部では双方向型・参加型の授業手法が大学全体平均より積極的に導入されていることが分かります。たとえば、「質疑応答」は文芸学部23.0%（大学全体18.8%）、「学生によるコメントペーパー」は31.1%（同23.2%）、「グループワーク」は22.0%（同19.4%）、「プレゼンテーション」は13.4%（同11.1%）、「ディスカッション」は11.8%（同10.3%）となっており、学生参加型授業への積極的な取り組みがうかがえます。

さらに、「授業を通じて身についた資質・能力」に関する設問では、「言語運用能力」が文芸学部28.7%（大学全体22.0%）、「構想力」が12.1%（同9.6%）、「柔軟な発想力」が12.3%（同10.1%）、「俯瞰力」が9.1%（同7.5%）となっており、学部の特徴が明確に表れています。加えて、「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」についても大学全体平均を上回り、演習やゼミを中心とした学びの形態を通じて、卒業論文執筆にもつながる多面的な能力育成が効果的に行われていることが示されています。

「数理的能力」の回答率が比較的低い点については、文芸学部の専門領域の特性を踏まえれば、ある程度は自然な結果として理解することができます。一方で、「課題発見力」「課題解決力」に関する回答が全体平均をやや下回っている点については、今後も検討すべき課題であると考えられます。もちろん、演習やゼミ、卒業論文執筆を通じて、学生たちは自ら問いを立て、資料を調査・分析しながら考察を深める力を着実に身につけていると考えられます。しかしながら、学生自身がそれらの能力の伸長をより実感できるよう、授業や指導の中で学習成果を可視化し、課題設定や問題解決のプロセスをより意識的に共有していく必要があるでしょう。

以上

